子ども主体の考え方に基づく環境構成指導の試み

―壁面構成作成に関する学生指導の実践的研究―

加藤　望

Lecture For How To Make A Composition Of The Environment Centered On Children

―A practical study to teach students wall decoration―

NOZOMI Katou

保育者養成課程において、保育室を飾る壁面構成の作成方法を指導するにあたり、子どもを主体とした考え方に基づく壁面構成指導を試みた。本稿は４年間にわたる指導方法の改善の過程について記したものである。

学生にとって、壁面構成作成に関する知識・理解を深めた上で、実際に作成するという活動的な学びを取り入れることが有意義であること、実際に子どもの作品に触れる機会を持つことが重要である。

Keywords： 子ども主体，環境構成，壁面構成，製作活動，保育者養成校
Child Centricism，Environmental Composition，Wall Decoration，Production Activities，Early Child Education and Care Teacher Training School

１．保育者養成課程で壁面構成を学ぶことの意義について

(1) 歴史にみる室内装飾の変遷

幼児学用語集（2017）によると、壁面構成とは「壁面に平面又は半立体の装飾を施すこと」をいう。保育の場に飾られている壁面構成は物的環境の一部であり、保育者が意図を持って整えていると考えられる。まず１つ目に、子どもの造形作品を飾る意図（造形）、２つ目に、子どもへ伝えたいことを文字ではなく絵で伝える意図（デザイン）、そして３つ目は季節感を表したり室内の心地よい雰囲気を感じたりできるようにという意図（インテリア）である。また、正岡ら（2015）の事例報告によると、現在、幼稚園・保育所において飾られている壁面構成の形式は平面構成のみ、平面構成と立体構成を合わせたものの２つに分類でき、保育者が子どもの造形作品を構成して掲示しているケースが多いとされている。

壁面構成は明治以降に、黒板の役割から派生したものと考えられており、現在では「保育らしい・かわいらしい」イラストを利用して作成されている（西村，2017）。壁面構成をデザインとして研究した豊泉（1995）によると、保育者の作る壁面構成はどの園でも似通ったパターンであり、あまりオリジナリティがみられない。その理由は、保育雑誌やマニュアルを参考に模倣して壁面構成を作成することが多いためであると言っている。しかし、デザインの専門家ではない保育者がオリジナリティのある壁面構成を作成することは、それなりの技術や構成力が必要であり、限られた時間と限られた予算で壁面構成を作成していることも踏まえると安易にマニュアルを参考にしていることを否めないとも指摘している。

壁面構成の歴史を調査した福田ら（2014）の報告によると、現在つくられているような壁面構成がみられるようになったのは平成頃からであるという。例えば大正 15 年頃の幼稚園では雛祭りを祝う席での写真からは、第 13 恩物の剪紙法と第 18 恩物の摺紙法の作品を額にいれて壁面に飾ってある。その周辺を飾っているのは、保育者が作った作品ではなく、一輪挿しに入れられた花である。このように、明治期の幼稚園には物的環境を整える意味として、室内装飾に意識は向けられていたものの、今日のような装飾はみられない（鈴木，1997）。

日本人が室内に装飾を施すようになった歴史は浅く（大廣，2003)、インテリアデザイナーである内田繁はその著書の中で、室内装飾としてのインテリアが日本で一般的に意識されはじめたのは、個人が自分の思想や好みを持ち始めた大正デモクラシー頃からだと推察している。

このように壁面構成は、造形、デザイン、インテリアの意図を持ちながらも、その歴史は浅いことから、保育者にとっても試行錯誤すべき余地が大きい分野である。

(2) 壁面構成を指導する意義と目的

造形・美術的な技法や技術を学ぶのであれば、造形・美術を専門とした教員が指導する授業がある。しかし、保育者養成課程で壁面構成の作成方法を指導するのであれば、学生が技法や技術を身に付けるためだけではなく、子どもを主体とした製作活動の在り方を学ぶ機会としたい。保育者となり、実際に壁面構成を作成することになった場合、素材や画材、テーマを選択する方法や、参考とする作品に対する基本的な思考力を培いたい。

２．壁面構成指導に関する授業実践方法

(1) 壁面構成指導の位置付け

保育者養成課程には様々な授業科目がある。その中で、壁面構成の指導を『造形・美術』の授業内で行う養成校が多い（大塚他，2016 等）中、本学ではこの壁面構成指導を、実習準備学習の一環と位置付けて指導している。実習準備学習とは『教育実習指導Ⅰ』(2 年生）及び『実習入門』(1 年生）にて縦断的に行われる教育であり、3 つの内容から構成されている。その 3 つは、①園見学（保育所・幼稚園を訪問し、保育見学をする）②保育室観察（学内にある保育室にて、保育観察を行い、観察記録を書く）そして③壁面構成（学内保育室の玄関を装飾する壁面構成をグループで作成する）である。実習教育の前段階としてこれらの活動を行うことで、幼児教育・保育に対する理解を深めること、グループ活動を行うことで学生の協同性の育ちを支えることが目的である。

(2) 4 年間にわたる壁面構成指導の変遷

4 年間にわたり、2 年生に対して壁面構成の指導を行った（表 1 参照)。年度ごとに授業内容を見直し、改善しながら実施してきた。授業実施方法としては、学生全体へ 90 分の講義を行った後、授業以外の時間を利用して壁面構成を作成することとしている。なお学生が作成する壁面構成に関しては、掲示場所の都合上、大判の色画用紙に予め作品を接着してから掲示する必要がある。

初年度にあたる 2014 年度は、これまでの授業担当者が行っていた壁面構成指導方法をそのまま引き継いた。学生は固定されたグループ毎（1 グループ 10 人前後、全 6 グループ）になって、季節に合った壁面構成を作成した。作成に先立ち、基本的な壁面構成の作成方法（レイアウトを考える、下書きをする等）や壁面構成を保育室に掲示することの意義等を説明した。実際に壁面構成を作成するにあたり、教員が指定した事項は「掲示期間のみ」であり、使用画材やテーマについてはグループ毎に学生が相談し合って考えた（写真 1 参照)。

表１　壁面構成指導の変遷

実施年度	造形主体	構成主体	テーマ決定	使用画材決定	実施方法
2014	学生	学生	学生	学生	学生自身がテーマや画材を選び、グループで作成する。
2015	学生	学生	学生	学生	学生自身がテーマや画材を選び、グループで作成する。
2016	子ども	学生	学生	教員	学内保育室で学生が主導して子どもたちと共に製作活動を行い、後日、壁面を構成する。
2017	子ども	学生	教員	教員	学内保育室の子どもたちが日常保育の中で保育者と共に作った製作物から、壁面構成を作成する。

結果として、美術的な技法や使用画材が同じものになりやすく、作品に偏りが生じたことや、ハロウィンや芋掘りといった保育室に在籍する乳幼児にとってあまり身近とは言えないテーマを選出する様子があった。また、学生がイメージして作成する保育室の壁面構成は、インテリア、芸術的要素という認

識ではなく、イラストに近い物が多かった。保育室の壁面構成＝イラスト作成のような認識であることがわかった。また、立体的な作品に対する貼付強度の認識が甘く、およそ１ヵ月という掲示期間に対して、耐久性がなく剥がれおちてしまうという点にも課題があることがわかった。

写真１　2014 年度　学生作成の壁面構成

6 月の壁面構成

［使用画材］
色紙　色画用紙　不織布　綿　モール

10 月の壁面構成

［使用画材］
色画用紙　銀紙　不織布　スズランテープ
モール 綿

これらの反省を踏まえて 2015 年度は、水玉やもこもこといった様々な種類の色紙、オーロラシート、でんぐり、ぷちぷち等の多様な教材を用意し、学生が自由に使用できるよう教材室を整えた。更に、作成前の指導において、保育室のイメージを意識することや、作成した壁面を見る対象者が乳幼児とその保護者であること、可愛いさに傾倒せず芸術的な要素を大切にすることを伝えた。立体物を作成する時には、作品の重さや貼付方法に十分注意を払うよう喚起した。

結果として、2015 年度の学生は様々な画材や技法を使用して作成するようになった（写真 2 参照）。学内保育室は 3 歳以下の乳幼児を保育しており、木を基調とし日差しが降り注ぐ設計の保育室である。その部屋に飾るということをイメージすることにより、作成する壁面構成はパステルカラーを基調したものや淡い色を基調とものとなり、それぞれ温かく明るいイメージの作品となった。

写真２　2015 年度　学生作成の壁面構成

6 月の壁面構成

［使用画材］
色画用紙　色紙　水玉色紙　ぷちぷち
ビニールテープ　不織布

7 月の壁面構成

［使用画材］
色画用紙　色紙　オーロラシート　段ボール
ビニパック　でんぐり　水彩絵の具
色鉛筆　マーブリング溶液　和紙

2015 年度はこのように子どもたちに喜んでもらえるような、そして学生自身も意図を持って壁面構成を作成することができた。しかし、ここで保育の基本的な考え方に立ち返ると、これらの壁面構成では学

生が主体となっており、子ども主体の壁面構成にはなっていない。よって、学生に子ども主体の保育を考える姿勢を身につけてもらいたいという目的をもち、次年度以降の壁面構成指導を行うこととした。そこで、学内保育室の室長及び保育士へ依頼をし、相談と計画を重ねた上で、2016 年度は保育室の子どもたちと学生が一緒に活動を行って壁面構成を作成するという授業方法を計画した。学内保育室の子どもたちと保育者にも、様々な画材に触れる機会にしたいと考え、学生が活動に使用する画材は教員が指定し、保育者の保育計画を確認した上で使用することとした。

結果として、学生からは「2 歳児の子どもと一緒に活動を行うことで指先の発達が理解できた。」「子どもと一緒に活動することが楽しかった。」「絵の具を指に付けることを嫌う子どもにはどうしたら楽しんでもらえるか悩んだ。」「活動の終わり方に難しさを感じた。」という感想があり、ただ子どもたちと活動をするだけではなく、自身の活動を振り返る機会やどうしたらよいかを考える機会にもなった。

写真３　2016 年度　学生作成の壁面構成

6 月の壁面構

［使用画材］
色画用紙　水彩絵の具　タンポ　不織布

8 月の壁面構成

［使用画材］
ゆびえのぐ　色画用紙　モール

学生と子どもの活動に豊富な種類の画材を導入することは、保育士にとっても新しい画材に触れる機会となった（写真 4 参照）。5 月、学生と子どもたちがステンドシールを透明うちわに貼る製作活動を行った。ステンドシールは光を透かせると鮮やかに発色することや、彩色された影ができて面白いため、子どもたちと製作活動を行った後はスタンドライトを使って作品鑑賞も行った。活動後、予備として準備していた画材を保育室に託すと、保育士は画材からインスピレーションを得て、窓ガラスに絵本『はらぺこあおむし』をモチーフとした壁面構成を作成した。

このように保育士が日常保育の中に新しい画材を取り入れると、子どもたちは学生との製作活動から日常保育への繋がりを持つこともできる。使用した画材に対しても、学生と活動したその場限りの関わりではなく、長期的に関わることができるようになる。更にこの透明うちわは、壁面構成の掲示終了後、それぞれ家庭へ持ち帰ることができ、うちわとして利用することや光を通して遊ぶこともできる。日頃、保育室での学生活動に理解をいただいている保護者に向けて、学生と子どもの活動を報告する波及効果もねらった活動である。

ひとつの壁面構成を作成するにあたって子どもたちの参加だけでなく、保育士や保護者も巻き込んだ活動にすることができる。子どもと一緒に活動することで、学生にも保育は子ども主体で計画されることや、「子どもの作品を飾る」という壁面構成の目的の一つが理解しやすかった様子である。本授業の開講時期は前期であるが、壁面構成活動に限っては通年で行っている。本学では 2 年次の 11 月に初めて教育実習を行う。一年通して学生の様子をみると、教育実習経験以前の学生では、計画した製作活動に子どもの姿を合わせようとする傾向にあり、子どもを「指導する」という立場で振る舞う姿がみられた。しかし、教育実習経験後の学生では、子どもの姿に寄り添おうとする姿勢で接する姿が見られ、子どもとの関係性の持ち方にもゆとりがあるように見受けられた。教育実習経験以前の学生では、子どもと一緒に活動するには、基礎的な学びが深まっていないように感じられた。

写真４　2016 年度　新しい画材・教材を使った活動

５月の壁面構成

ライトを使って

保育士作成　『はらぺこあおむし』

そこで、2017 年度は保育士と相談し保育室で行う製作活動は保育士に一任することとした。学生は子どもたちの製作物を使用して壁面構成を作成することとした。

写真５　2017 年度　学生作成の壁面構成

６月の壁面構成

［使用画材］
色画用紙　和紙　目玉シール　モール

８月の壁面構成

［使用画材］
色画用紙　オーロラシート　キラキラシール色紙

画材を準備するために時間が必要であること、保育士との事前計画が必要であること等から、画材やテーマは教員が設定した。授業の活動としてはスムーズに行うことができたが、学生の作る壁面構成は一辺倒になってしまった。壁面構成を作成するという授業内容は活動的であるが、それ故に学生の意欲や主体性が問われる活動でもある。子どもと一緒に活動していた昨年度に比較すると、残念ながら全体

的に学生の壁面構成に対する意欲は低下したのではないかと感じている。学内保育室の保育士からも、前年度のように指導計画案に基づいて学生自身が活動できた方が、子どもたちにとっても活動の明確さが出てよいのではないかという課題をいただいた。

３．将来に生かせる環境構成指導の在り方についての考察

4 年間行ってきた授業実践から、本学の『教育実習指導Ⅰ』で行う壁面構成の指導について学生が保育者となった将来にも生かせるような指導の在り方について、以下の三つを柱とすることを提案する。

(1) 壁面構成作成の基礎・基盤となる知識・理解を修得する

まずは、保育における壁面構成の位置付けと意義を理解する必要がある。その上で、壁面構成作成の基本を学べるように指導する。日本の就学前施設では主に色画用紙を使用し、イラストを基調とした壁面構成が作成されていることが多い。いわゆる「保育らしい、かわいらしい」壁面構成を作成する為には、イラストから型紙をおこし、その型紙を使用して色画用紙に下書きをし、切り取るという方法がある。この型紙をおこす際に、参考とするデザイン選びに関する思考は学生時代に培っておきたい。保育者が選択するデザインのひとつひとつは、物的環境として子どもたちに影響を及ぼしているということを理解し、意図を持ってデザインを選択するという思考を養いたい。

さらに、直線や曲線といった図形も規則正しければ美しい仕上がりになることや、一度に多量の物を作る場合には、色画用紙を重ねて切り抜くことで作成時間を短縮することもできる。こういった基本的な技術も知識として得る必要があるだろう。

近年では、保育者の労働時間削減のために壁面構成に写真やカラーコピーを使用する園、壁面構成を作成しない園、代わりに季節のインテリアを飾る園や壁面構成を保護者が作成する園もある。学生には基本的な技術と知識を学んだ上で、その技術と知識を使うか使わないかはそれぞれの園、保育者となった学生が子どもの最善の利益を考えて選択するとよいだろう。

(2) 子どもとの関わりを通して意欲的に活動する姿勢を養う

学生が保育者を志す動機のひとつとして「子どもが好き」という理由が挙げられるだろう。そして、好きなこと、もの、人に対して、人間は積極的に関わることができる。従って、学生は子どもと一緒に活動を行うことにより、学びに対する意欲をさらに発揮できるのではないだろうか。保育・教育実習以外の時間で子どもと一緒に活動する経験は、学生の意欲を養うことに対して肯定的な影響があると考えられるが、多くの学生はその機会を自ら持つ方法がわからないことや、消極的な部分が見受けられる。子どもと一緒に活動する機会を授業として実施することは、学生の学びへの意欲を養うことへ貢献すると考えらえる。

(3) 子ども主体の環境構成について振り返って考える機会とする

子どもと一緒に活動することにより、計画を立てたり、振り返りを行ったりすることは、幼児教育が環境を通して行われること、環境構成は子どもたちのためにあること、そして保育は活動を振り返りながら行われることを身に付ける機会となると考えられる。

４．まとめ

壁面構成の作成方法は幼稚園・保育所によってもそれぞれの文化があり、必ずしも保育者養成校で指導しなくてはならない内容ではない。壁面構成を作成するという授業活動は、学生が卒業後も専門性を向上させるように自ら努める姿勢や、子ども主体の保育とは何かを考える機会、活動を振り返って次へ生かす習慣を養うための手段のひとつである。

引用文献

正岡さち，團野真紀子(2015)「『幼稚園・保育所における壁面構成』の事例報告」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学)』第 49 巻 p. 107～p. 111

西村愛子(2017)「壁面制作についての一提案―造形表現の授業実践報告―」『駒沢女子短期大学研究紀要』50，p. 73～p. 80

小田豊，山崎晃(2017)『幼児学用語集』p. 157 北大路書房

鈴木法子(1997)「壁面構成とは何か 1～明治期の幼稚園における壁面構成の萌芽～」『日本保育学会大会研究論文集』50，p. 474～p. 475,

豊泉尚美(1995)「幼児教育におけるデザイン活動としての「壁面構成」」『デザイン学研究』43 巻 5 号, p. 1〜p. 4
内田繁監修，鈴木紀慶，今村創平(2013)『日本インテリアデザイン史』(第 1 版)オーム社